

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——（十九）

津 守 真

未来と過去とに連なる子どもの行為

——四歳児三学期の描画作品から考える

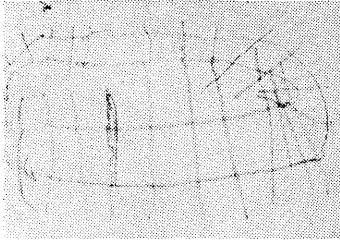
私の手もとにある、四歳児三学期の子どもの描画作品の多くは、形としてととのったものではないし、目立つものでもない。すぐには意味のとりにくいものも多い。しかし、よく見てみると、そこには、ひとりひとりの子どもはかなり永続的な性質の一部があらわれているように思う。そのときに子どもが必要を感じたり、考えついたものが描かれるだけでなく、むしろ、子どもなりに実現したいと思っている心の動きが表現されている。

四歳児のそのときにも、子どもの自発的行為に肯定的に接すれば、具体的行為の底に、子どもの心の動きを感じとることができ、しかしそれは、ずっと後に、もっと十分に実現されてから見かえすと、一層はつきりする。四歳児のときに、すでに未来に向けて望み見ている自分自身の傾向があらわれているのであろうが、もちろん、それは子ども自身によって、幼い段階で明瞭にとらえられているとはいえないし、また成人するまで記憶されるところとも言えない。本人によってそれがとらえられるのは、ずっと後になって、これも最初の具体的契機などは忘れ去られてしまつて、遙か以前からつづいているものとして仄かにとらえられるに過ぎないのである。

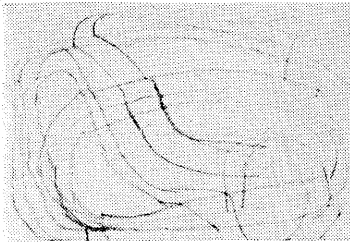
自分自身のことではないとなると、多分とか、恐らくとか、多くの留保をしつつ語りねばならないが、ある年月にわたって、未  
来が現在になり、過去になるのを見てくると、幼時期のある時点  
のことが、後にまでつづく個人の傾向を示していると思えること  
が少なからずあるように思える。四歳児の描画について、このよ  
うな例に気付いたので、次に、いくつかの例について述べようと  
思う。

写真(1)―(3)は、四歳児のYが、家庭で描いたものである。

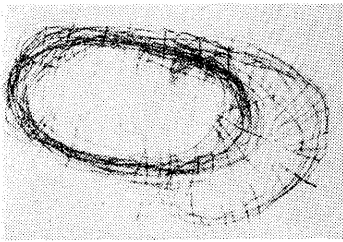
私は長い間、この描写の意味をはかりかねていた。数年たって



▲写真1



▲写真2



▲写真3

から、この描画をかいたころの次のような記録に気が付き、その  
ことからこの描画のことを考え直してみた。

一月十五日

子どもたちは、母親に、毛糸でミータンヤアドの帽子などを編  
んでもらい、そのまわりでうらうらとおしゃべりをしている。

P 「お母ちゃま、どうして、そんなにあみものができるの？  
中学かなんかで習ったの？」

母 「自分で考えるのよ」

P 「お母さんに教えてもらったり？」

母 「お友だちも教えてくれるし、本よむとすぐに分るようになるの」

Y は、さっきからずっと、編棒と毛糸を両手でぐるぐるやっていたが、「あら、こんなのができた——」と見せる。

子どもたちは、母親のまわりに集まって、毛糸編みを見ながらおしゃべりしている。

P 「ぬいぐるみつくれた」と私にみせる。「プープちゃんのおふとんできた。こんどはエプロン作ろう」

Y は、針を出してもらい、針をつけている。A は、手でくさりあみをしている。もう、一時間半くらいつづいている。(Y、五

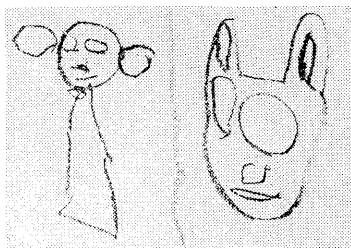
歳二ヵ月、P、七歳〇ヵ月、A、八歳三ヵ月)

Y はあまり口をきかないが、両手をくりくり動かしているうちに、編棒と毛糸で何かを作ってしまう。こうやって、母親のまわりで毛糸をいじっていることはしばしばあった。その後、Y は、ひきつづいてもっと大きくなるまで、両手を使って、手で何かを作ることが好きである。手で考えていると言っているような場面にはしばしばぶつかる。

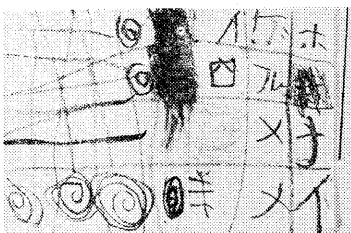
さて、こういう背景のもとに、写真(1)―(3)の描画をみると、これは、両手をくりくり動かして、編棒で毛糸を編んでいる触運動の感覚をあらわしていると思う。四歳児の三期のころには、編物と言っても、そのでき上りは、毛糸をからみあわせた小さなかたまりにすぎない。しかし、ここで編み棒を動かしながら両手の指をからみ合わせる触運動のイメージは、この後ずっと、この子どもの生活の重要な位置を占めている。その出発点の、これから次第に実現されてゆこうとするときの、原初的なイメージがここにあらわれている。

写真(4)、(5)に示すのは、別の子どもの四歳三学期の描画である。マジックやクレヨンで紙面を二つに分割し、また更にいくつものに分割して、その中に異なったものを描く。無雑作に、何枚も描かれるので、この時点では、ほとんど無意味なようにみえる。ところが、ひきつづいてこの子どもの描画をみてゆくと、ひとつの画面の中に、いくつもの異なる空間がつけられて、繊細で多面的な動きのある全体を作り上げてゆく。これについては、ここではこれ以上述べないけれども、無雑作な分割とみえる四歳児のこの段階での描画は、その初期のあらわれと思う。

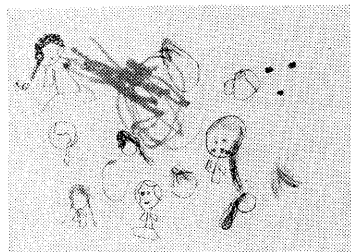
附属の幼稚園で、丁度同じころの時期に、電車の切符や乗換案内



▲写真4



▲写真5



▲写真6

内を作っている子どもが何人もいる。その中のある子どもは、画用紙に何本も線をひいて、いろいろと字や記号をかきこんで、それを作ることに汽車ごっこ重要な部分があるみたいである。それがその子どもの中でどのように展開してゆくかは、まだ分らない。形の上では、この写真の描画に類似しているので、異質な空間の分割と構成がこの子ども達の心の動きの中にあるのかもしれない。しかし、未来が未知な段階では、ただ一つの可能性として、楽しみに望み見るのとどまる。その子ども達の心の中に動く原初的なイメージを、子ども自身が追い求め、明瞭にしてゆくことにより、その子どもにもふさわしい未来が実現されてゆくのであるから。

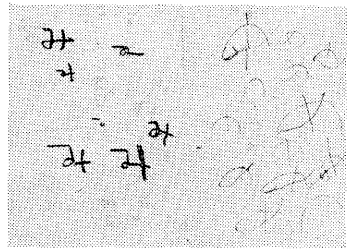
写真⑥は、四歳三学期にAが家庭でかいたものである。写真⑥では、人の横顔をかこうとし、自分の思うようにかけなくて、何度もかきなおす。このことから、Aの描くものには、かきかけでやめるものが多くなる。また、うまくかけるように、同じものをいくつもかくことが多くなる。人の横顔、髪型、ハイヒールの靴など、そのときには、何日間も、同じものをかいて自分で練習している。自分の心の中に、こういうものをかきたいという理想が生れ、それに近づくように努力し、練習する。

このことは、かならずしも、四歳になってしまったことでは、もっと小さいときから、何か自分の気にいる状態が心に描

かれて、それに達しないために、泣きわめいたりすると思われることがしばしばあった。それが、描画の上で、何度もかきなおしたり、自分の思うようになるまでいくつもかいたりするようになるのが、このころであるといえよう。丁度同じころに、字を書くことに興味をもちはじめたが、おとなに、うるさいほど何度もきいて、同じ字を書きならべる。(写真⑦)「ゆ? おゆのゆ? それじゃ、あたし おゆてかけるわ。いくつも同じ字を書く。次にわをかいて、あのね、は、でもわってよめるんだよ」。字に興味をもちはじめたときには、こうして自分で練習し、自分でできるようになる。

自分の心の中に理想が生れると、自分で努力し練習するという傾向は、この後もずっと続き、いろいろの形であらわれる。幼稚園を卒業するころに、この同じ子どもが、食卓の会話の中で、ふと次のようなことをいう。「あたしってね、いつも、はじめはうまくできないけれど、努力しているうちにできるようになるよ。なわとびだって、はじめはできなかったでしょ」「こうした心の動きは、だれにも共通にあるものであるが、ある子どもにはその傾向が時に強く、また永続的で、その人の性質といえるほどのものになるであろう。

附属幼稚園で、四歳児の三学期に、これに似た作品に出会うと



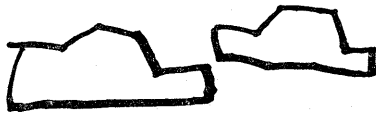
▲写真 7

き、それはそのときのことであるのだけでも、その子どもにとっては、永続的な意味をもつ重要なものであるかもしれないと思う。

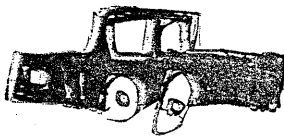
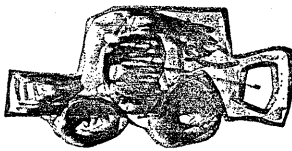
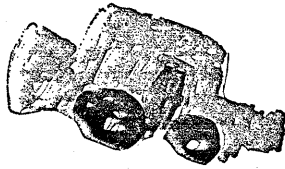
## 二月十四日

戸外は特別に寒く、砂場で遊んでいた子どもたちも、じきに部屋の中に入ってくる。

Sは、私に自動車をかいてはしがる。こういうとき、たいがい、私は子どもにもかける程度のものかく。子どもの理想どお



▲写真 8



▲写真 9

りのものをかこうとすると、子どもの理想とも違った、子どもには手の負えないものができてしまいがちになるからである。私は簡単な自動車をゆっくりかきはじめる。Sは、そうじゃないとかいろいろ言うが、結局、自分でかきはじめる。かきかけては、うまくいかないと言う。(写真⑧) 私は傍にいて、かっこいいのができてきたな、など言ううちに、何度もかき損じながら、自動車がかき上り、得意な様子である。私は切り抜いてやると、次々に自動車をかき、自分で切り抜く。(写真⑨)

Dが画用紙を小さく切って、二つ折りにし、刻みをいれた小さ

な飛行機をもってくる。二つ折りの小さな飛行機が二つ、二重に滑りこむようになっていて、うまく考えて作ってある。Dは、三歳のときから、四歳児の二期期まで、先生についてまわったり、うろうろしていることが多かった子どもである。四歳の三期期になってから、室内で、自動車などこまかいものを、自分で考えて丹念に作って、自信をもって持ってくる。この日の飛行機もその類いのものであった。

私は椅子にかけて、画用紙のきれはしを切っていると、Hが、お金作ってと言ってくる。丸く切ってお金を作る。A、K、M

が、先生に作ってもらったあめや、自分の作ったあめをもってきて私に見せるので、私はたべる。Kが私の膝に坐り、私に何をつくっているのかきくので、弁当箱だというとき、Kは、バナナとか人参とかいろいろのものを切って、弁当箱の中にいれる。こうして、みんなでごたごた作っているうちに昼食になる。

あとで気が付いたことであるが、Kは、画用紙で作った弁当箱を、部屋の片隅のプレヤーの下の見えないところにいれていた。

写真(8)に示した、途中で描いて止めた、Sの自動車の輪廓の描画は、Aの場合と同様に、自分の理想に近づくように努力し、練習している過程とみることができ。しかし、それだけではないことは、これを描いた状況からよみとることができよう。Sは、自分の理想としている自動車があるけれども、最初は自分で描こうとしない。まずおとなにたのむ。それから自分で描きはじめるが、自分の描いたものを批難されるのをおそれているかの如くである。それで、かきかけでやめて次をかく。こうしていくつもかいているうちに、自分の描くものが批判の対象になるのではないとわかり、自分の理想に向って、自信をもって歩みはじめる。

この点で、Sのかき損いの描画は、過去と未来とに関連してい

る。輪廓をかきはじめるや否や、それではいけないという強迫観念が生じて、途中でやめる。それはS自身の過去の体験の中で、自分が手をつけたものを批判され、批難されることが多く、それを恐れることからきているのではないかと思う。

Sの心の中にあつて自らの自発的行為を批判している存在から脱出することができたとき、Sは自分の理想とするものに向つて歩きはじめることができた。そのときには、自分の氣にいるものができるまで、いくつもかきかえるのは、楽しい努力となるであろう。

こういう子どもの場合には、心の中に理想が生み出されて、それが実現するまでには、自分自身の中の何物かを乗り越え、また、努力と練習を重ねてゆくことが心の主要なテーマとなつていると言つてよいであろう。こういう子どもは、成長するにつれて、理想が実現するまでに、長い努力の期間をもちこたえねばならないことが多くなるであろう。その期間は、焦ったり、悩んだり、迷ったりすることも多く、周囲のおとなにとっては、その感情の起伏だけが見えて、本人の心の中に、原動力となる理想があることすら見えなくなることもある。そのときに、周囲のおとなは、現在を、過去と未来に連なるものとしてとらえることにより、もっと大きな視野の中でその子どもとつき合つてゆくことができ

るであろう。

Dは、二つ折りの小さな飛行機を丹念に作る。Dは最近自分身の本領にゆき当たつたみたいである。そのくらい、何かを作つているときのDはいきいきしている。私はDに関する観察と感想を担当の先生に話したら、そうでしょうと、先生は目を輝やかして語つた。先生とDの間には、相応するものがあつたのだと思う。子どもの中の心の動きを、周囲のおとなが見出して、それとつき合つてゆくことにより、子どもは成長してゆくのであると思う。

Kは、画用紙の小さな弁当箱の中に小さな物を刻んでいれることに興味をもつ。小さな物や内部のイメージは、Kにとっては親しみのあるイメージなのである。

幼児期にある、これらの子どもの未来は、まだかくされている。私共は、この子どもたちの未来の具体的なことについては何も言うことはできない。けれども、未来について、全く何も望み見ることができないわけではない。私共は、子どもたちが自分らしく充実して生き、遊ぶことができるようにしてやることができる。

き、その中でその子どもらしい心の動きをとらえることができ。それは形をかえて、未来にひきつがれ、成長と共に磨かれてゆくものであると思う。私共は、それを望み見つつ、現在を楽しんでつき合つてゆくのである。

(つづく)

